

---

# また飛べるよ

かみたか さち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

また飛べるよ

### 【Nコード】

N9715S

### 【作者名】

かみたか さち

### 【あらすじ】

「世界は一面のキャベツ畑だ」と信じて大きくなったアオムシ。はれて蝶となった彼が見た世界に、大好きなキャベツや花はほんの少ししかありませんでした。期待していた世界に失望しても、周りに差し伸べられる手や言葉があるはず。それに気がついて、その手をとらえる勇気があるなら「また飛べるよ」。

アオムシのチヨタは、大好きなキャベツの上でのんびりと食事をしていました。ここはチヨタが見る限りキャベツばかりで、甘い葉っぱはいくら食べても無くなりません。

「ああ、きっと世界は、キャベツで出来ているんだ」

チヨタは、満足そうにため息をつきました。

そのとき、上の方でくすくす笑う声がしました。見上げると、ミツバチのお姉さんがチヨタの頭の上まで飛んできました。

「世界はキャベツだけじゃないわよ」

「本当？ 何があるの？ 教えて」

チヨタが叫ぶと、ミツバチのお姉さんは足に付いた黄色い球をチヨタの方へ差し出しました。

「花よ。おいしい花粉と蜜がたっぷりあるのよ。ちよつと触っただけでふわふわゆれて柔らかくて、ああ、もうすてきなんだから」

「ふわふわと。おいしいーい」

ミツバチのお姉さんにつられ、チヨタもうつとりと、うわ言のように繰り返しました。

「ぼく、そのハナ、みたいなあ」

「あら、近いうちに見られるわよ」

チヨタが目を丸くすると、ミツバチのお姉さんは何か言いかけましたが、後ろから飛んできたおばさんミツバチにせかされ、飛んで行ってしまいました。

「ハナ、キャベツ。きっと世界には、たくさんのハナとキャベツがあふれているんだ」

チヨタはぼうっとなって、そして、思い出しました。自分は、アオムシなのです。アオムシは、蝶になるのです。

「ようし、いっぱい食べて、早く大きくなるぞ！」

チヨタは、キャベツにかぶりつきました。

そうして何日かたったある日。キャベツの葉についた、乾いた薄い色のさなぎの背中がぱくりと割れました。中から、モンシロチョウになったチヨタが顔をのぞかせています。

長い間縮まって眠っていた後ですから、チヨタはううん、と伸びをしました。

「やった。これで、ハナを見に行ける」

チヨタは、白い美しい羽が乾ききるまでもどかしく、何度も羽を動かしては、まだ飛べないか、もう飛べるかと試しました。

何度目かの羽ばたきで、チヨタの体はふわりと舞い上がりました。「飛んだ。飛んだぞ！」

キャベツの葉を飛び越え、空がぐんぐん近づきます。チヨタは興奮して、もっと高く、高く飛び続けました。宙返りをしたり、ジグザグに飛んだりして満足したところ、チヨタは花を見たいと思いました。

どんなにすてきな世界だろうか。眠っている間夢に見ていた一面のキャベツと花を思い出し、チヨタは苦しいほどにときどきしました。やっと、この目で世界を見られるのです。

大きく深呼吸して目を下へ向けたチヨタは、あつ、と声をあげました。そこに、チヨタが想像もなかった世界があったのです。

一面に広がっていたのはキャベツでも花でもなく、冷たく光を跳ね返す角ばったものでした。暗い灰色の建物が、うねうねと連なっています。

よく辺りを見渡すと、建物に囲まれた小さな空間にキャベツ色が見えました。あれが、チヨタの世界のすべてだったのです。猫の額のような菜園に育つ数株のキャベツでした。

花もありましたが、チヨタが一飛び風にのれば飛び越せてしまうくらいしかありません。

目の前が真っ暗になり、チヨタの体は枯れ葉のようにキリキリ回って落ちて行きました。

雨が、ぽつりとエノコログサの葉をゆらししました。チヨタは、地面にうずくまっています。しぶきが、まだ新しい羽のすぐ近くへ散りましたが、チヨタは動きませんでした。雨粒は、次第に大きくなってきます。

「大変大変。あ、ここで雨宿りできそう」

甲高い声がして、黄色い蝶が舞いおりました。密集したブタクサの葉陰にもぐった黄色い蝶は、一息ついてチヨタに気がついたようです。

「大変大変。早くこちらにいらっしゃいな。せっかくの羽が濡れてしまいますよ」

呼びかけてチヨタが動かないでいると、黄色い蝶はチヨタの背中を押し、それでも駄目だと分かると、ブタクサの葉を掴んでチヨタのほうへ引っ張ろうとします。

「いいんです。もう」

チヨタは、暗い声で言いました。

「キャベツもハナも、無いんです。だから、ぼくはもういいんです」  
チヨタの目から、砂粒のような涙がにじみ出しました。

黄色い蝶は、しばらく黙って、雨のように次から次へ落ちるチヨタの涙を見ていましたが、やがて、ふう、と笑いました。

「私も、そう思ったことがありますよ」

柔らかな声に、チヨタは顔をあげて、まじまじと黄色い蝶を見つめました。黄色い蝶は、あんまり見られたものですから、ぽ、と頬を赤くして肩をすくめました。

「ね、雨があがったら、一緒に飛んでみませんか？ 悪いものばかりじゃないですよ」

チヨタがじっと黙って考えていると、黄色い蝶が細い小さな手を、チヨタへ差し伸べました。

「ね？」

長い間、黄色い蝶の手を見ていたチヨタは、思い切ってその手に自分の手を重ねました。細くて小さくて、でも、黄色い蝶の手は、

ほんのり温かく感じられました。

雨上がりのビルの間を、白い蝶と黄色い蝶が、ひらひらと飛んでいます。上になり下になり、前になり後ろになり、ずっと遠くまで飛んで行きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9715s/>

---

また飛べるよ

2011年5月3日22時40分発行